

大槌町教育委員会 教育長プレゼン①

「3.11大震災津波から 共に生かされ 共に生きる」 概要



震災前の大槌町



防潮堤、河口の水門



お寺の本堂



プロパンガスの爆発



壊滅した大槌町役場



大槌北小学校



大槌小学校



自衛隊員があらゆる活動を



震災後から一ヵ月後の大槌町

震災後、わたしたちが何にもまして励まされ力づけられたのは、全国各地から寄せられた数々の御支援と各地へ避難していった子どもたちの温かい受け入れでした。

全てが流出し町は壊滅状態に。人口の1割近くの人が犠牲になった。火災の温度は1000度近くになり、すべてが灰に帰した。河口から1.8km、職員室の時計が午後3時19分をさして止まっている。地震発生から30分で津波が到達。「自衛隊」翌日には大槌町に入る。7月末まで生存者の捜索、ご遺体の収容、瓦礫の撤去、道路の啓開、ご飯の炊き出し、物資の配送、お風呂の提供などありとあらゆる活動を行った。大槌中学校の体育館は遺体安置所に。安渡小学校、家が残ったのは6世帯だけ。コンクリート建築や鉄骨の建物が数戸残っただけで木造の家はほぼ100%破壊流出。ビデオカウンター2分ほどで中心部が破壊される。防潮堤(高さ6.4m)、河口の水門も役に立たない。お寺さんの本堂、これまで避難所としてきた場所だが津波に襲われ、亡くなった人も出た。噴煙は壊れた家屋の瓦や壁などから出たものと津波が建物にぶつかって起こった水煙。津波は3km先まで川を遡り、小川や用水路を伝って溢れ出す。黒い水が堤防を越えようとしている。この時点でも避難する車や大の動きが見られる。全てを流し去るまで、30分。プロパンガスの爆発が一晩中続く。さながら空襲のよう。役場の屋上、頭上を飛来するヘリ、飛行機、迫り来る火災、つのる寒さ、夜明けが待ち遠しい、太陽が昇れば希望が。一夜明けて火災はまだ治まらず。寸断された国道のがれきの間をすり抜けるように移動して情報収集。対策本部、情報収集、町民の避難対応にあたっていた職員40名が犠牲に。このほか多くの消防団員が犠牲になった。

大槌町教育委員会 教育長プレゼン②

「3.11大震災津波から 共に生かされ 共に生きる」 概要



避難所の安否確認情報



体育館が避難所となる



中・高校生が働き手に



手作りの卒業式



小学校4校の対面式



机がなくても勉強できる



体育館をパーティションで



外国の友達もできた



国際宇宙ステーションと交信

身内や友だちを捜し張り出されたメモ書きは、あっという間に壁面を覆い尽くす。家族や親戚、友だちに支えられて学校生活を送る。先生方も被災し、子どもと一緒に避難所生活を送る。町内で一番広い城山体育館。900人を超える避難者でいっぱいになりました。避難所では中高生が進んで役割を担っていました。

紅日幕もお花もない卒業式ですが…、今生きていること生かされていること、そして、卒業できることへの感謝を胸に。そして、いつもの年より半月以上遅れての新年度のスタートとなりました。被災した子にもそうでない子にとっても、やっぱり学校は一番の居場所。特別教室を全部つぶしても教室が足りなく、4校の子どもたちが一緒になって学年学級をつくる。通学は、各避難所から2台のスクールバスで一日の費用120万円。青空教室でないだけまだマシかも。体育館をパーティションで区切って教室に。

名前も顔もい主んでいるところも知らない人だちから、数え切れないほどの支援が届けられました。アメリカ・ワシントンD.Cの日本人学校からも文具が届けられる。おいしいコーヒーとドーナツのプレゼントも。駐日アメリカ大使のルースさんも訪れ、自らがバーベキューを振る舞う。青森三沢基地の子どもたちとの交流。ISSが大槌町上空を通過する十数分間、ISSに滞在中の古川さんと交信。

大槌町教育委員会 教育長プレゼン③

「3.11大震災津波から 共に生かされ 共に生きる」 概要



仮設校舎の組み立て開始



作業員が全国から集まる



小4校、中1校の対面式



仮設住宅での暮らし



学習の場を求めて



集会所で受験勉強



学校行事も徐々に再開



通学環境が大きく変化



自転車通学の中学生も

待ちに待った仮設校舎での授業再開。小学校9月20日、中学校22日。小学校棟2棟、中学校棟2棟、共用体育館1棟を建築。小学校の部材は北九州から陸送されてきた。全国からその道のプロが集結。小学生は中学生を敬い、中学生は小学生に優しく、また、その手本となる。48ヵ所の仮設住宅団地から通う子どもたちには学区は存在しない。仮設住宅では、自分の部屋を持つことは難しく、譲り合い、助け合っの生活。中学3年生は、受験に備えて流出を免れた集会所で勉強。進路選択にも変化が見られる。将来をしっかりと見据え、社会に役立つ人間になるための進路決定を考える。中学校初めての全校行事。体育祭で3年生をリーダーにこれまで以上の結束を。徒歩通学の子どもたちは、交通保安員に守られて安全に。PTAの地域活動としての見守り隊もコミュニティ崩壊で実施できない。自転車通学はヘルメット着用が定着。津波から生かされた命を交通事故で失うようなことがあってはいけないとの思いも。

〔終わりに〕 私たちは、この大震災・津波でかけがえのない多くのものを失いました。数時間前、数分前まで一緒にいた家族や友人。同じ時間を共に過ごした思い出の品々。そして、明日の日を信じて思い描いていた夢の数々。でも、失ったものと同じ大切なもの。これまでの平穏な生活で忘れかけ、失いかけていたことに気づかされ、学ぶことができました。

これまで、自分を中心に、自分の意志で、自分の人生を生きてきたと誰もが思っていたに違いないのです。しかし、そうではなく、目に見えない大きな力によって生かされてきたのだと思うようになったのです。これから先、何のために生かされているのかを問い続けなければならない。

同時に、自分につながるすべての人と共に生き、共に生かされていることも忘れずに。